# 中村正直の幼児教育観

## ── 乳幼児期からの環境による教育の重要性の認識 ──

小川澄江（おがわすみえ）
（本学教授）

### はじめに

平成29（2017）年改正の『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育･保育要領』には、幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園はともに「教育を行う」施設であり、その教育・保育はともに「環境を通して行う」ことを基本としていることが記されている。『幼稚園教育要領』は幼稚園の「教育課程その他の保育内容の基準」（学校教育法施行規則第38条）として発行されている文部科学省告示であるが、その解説として平成30（2018）年3月23日に『幼稚園教育要領解説』が出されている。同解説には、幼児期における環境の重要性について次のように記されている。

「本来、人間生活や発達は、周囲の環境との相互関係によって行われるものであり、それを切り離して考えることはできない。特に、幼児期は心身の発達が著しく、環境からの影響を大きく受ける時期である。したがって、この時期にどのような環境の下で生活し、その環境にどのように関わったかが将来にわたる発達や人間としての生き方に重要な意味をもつことになる。(1)」

人間の発達は、生得的な遺伝と生誕後の環境が大きく関わっていることは周知の通りである。そこで乳幼児にとっては、家庭環境や幼稚園・保育所・認定こども園における環境が重要となる。幼稚園・保育所・認定こども園等は意図的に保育・教育を行う場であり、幼稚園教諭や保育士・保育教諭等は乳幼児が主体的に環境に関わって望ましい方向に発達するような環境を構成しなければならない。

『幼稚園教育要領解説』には「環境を通して行う教育」の意義が次のように記されている。

「幼稚園教育においては、教育内容に基づいた計画的な環境をつくり出し、幼児期の教育における見方・考え方を十分に生かしながら、その環境に関わって幼児が主体性を十分に発揮して展開する生活を通して、望ましい方向に向かって幼児の発達を促すようにすること、すなわち『環境を通して行う教育』が基本となるのである。(2)」

では「環境を通して行う教育」という場合の「環境[3]」とはどのような意味なのであろうか。この問いに関しては、平成29（2017）年改正の厚生労働省告示『保育所保育指針』が大きな示唆を与えてくれる。

『保育所保育指針』においては、保育所における「保育の環境」に関して、次のように記されている。

「保育環境には、保育士や子どもなどの人的環境、施設や遊具などの物的環境、更には自然や社会の事象などがある。[4]」

更に保育所は保育士等の環境構成が重要であり、保育士の環境構成については『保育所保育指針解説』に次のように記されている。

「保育士等は、子どもが環境との相互作用を通して成長・発達していくことを理解し、豊かで応答性のある環境にしていくことが重要である。ここでいう豊かで応答性のある環境とは、子どもからの働きかけに応じて変化したり、周囲の状況によって様々に変わっていったりする環境のことである。」

保育所における「環境」については、「子ども自身の興味や関心が触発され、好奇心をもって自ら関わりたくなるような、子どもにとって魅力ある環境を保育士等が構成することが重要である。」「遊びが展開する中で、子ども自らが環境をつくり替えていくことや、環境の変化を保育士等も子どもたちと共に楽しみ、思いを共有することが大切である。」と記され、環境は固定的なものではなく、保育士が構成する環境は、子どもたち自身が作り替えていくことができる環境、変化する環境である[5]ことが強調されている。

今日の幼稚園教育や保育所保育の基本は「環境を通して」行うものであり、乳幼児期の教育においては保育者によって構成される環境がいかに子どもたちの発達に大きな役割を果たしているかが窺われる。

これまで見てきたように幼稚園や保育所における教育は「『環境を通して行う教育』が基本」である。そこで保育者は「環境に関わって幼児が主体性を十分に発揮して展開する生活を通して、望ましい方向に向かって幼児の発達を促す」環境を構成することが重要となる。

ところで「環境」の意味についてはどのように理解すればよいのであろうか。

『広辞苑』では「環境」について、次のように記されている。「①めぐり囲む区域。②四囲の外界。周囲の事物。特に人間または生物をとりまき、それと相互作用を及ぼし合うものとして見た外界。自然的環境と社会的環境とがある。[6]」

一般に環境とは、人間を含めて「生物をとりまき、その生物と相互作用を及ぼし合うもの」として捉えられ、広辞苑では環境には「自然的環境と社会的環境」があることが記されて

いる。

先に見た『保育所保育指針』においては「保育環境」として「人的環境」「物的環境」「自然や社会の事象」が挙げられている。

今日、人間も哺乳動物ではあるが、その発達過程は他の哺乳動物の発達の原則とはかなり異なることが知られている。チンパンジーやゴリラなどの類人猿の新生児は誕生時、親によく似た姿をしており、親にしがみつくことができる。人間の新生児は「生理的早産[7]」として他の類人猿の新生児よりも未熟な状態で誕生し、人間の手による長期の保護と教育を必要とする。人間の新生児は未熟で無力ではあるが、体重は約3000g、脳髄の重さは約400gもある。ゴリラの誕生時の体重は1500～1800g、脳髄は130g、チンパンジーは1890g、脳髄は約30gであるので、人間の新生児の体重は他の類人猿よりも2倍、脳髄に至っては約3倍も重いことが理解できる[8]。また人間は、生誕後1年間で体重は3倍の9000g、身長は1.5倍の75cmに達する。人間の生誕後の1年間の成長発達は爆発的で、このような急激な発達はその後は見られない。その後の人間の体重の増加曲線は、成長が早い他の類人猿の体重の増加曲線と交わり追い抜かれて、緩やかな発達曲線を描いて成体となる。人間の新生児の体重や脳髄が他の類人猿よりも重いことは、人間の脳内組織の複雑さと生誕後の発達の可能性を秘めていることを意味し、人間としての発達の可能性や能力の開花は、生誕後の環境に左右されることを物語っている。

明治の啓蒙思想家中村正直は人間の生涯において胎児期そして生誕後の乳幼児を取り巻く家庭環境の重要性に逸早く着目している。中村正直は国の強弱は人民の品行に関わることを認識し[9]、明治の近代国家を支える自主自立の人間像を理想的な人間像として描き、その教育に尽力している。中村によれば、教育は人間としての出発点即ち胎児期から始まり、胎児を取り巻く家庭環境、特に母親の胎教や言行、そして3歳からの幼稚園の環境、即ち保育室の中の3歳から7歳までの同年齢の幼児たち、天井は高く空気の通りの良い広い園舎や保育室、噴水や草花のある園庭、幼児のための低いテーブルや椅子、美麗なる絵画、その他幼児の目を楽しませる物や珍しい物、種々の旗、そしてピアノなどを備えた幼稚園の環境が重要なのである[10]。そこで本稿では、幼児期における環境の重要性の視点から、中村正直における環境観について考察を試みてみたい。

中村正直は天保3(1832)年5月26日に生まれ、明治24(1891)年6月9日に死去している。中村正直が江戸幕府の瓦解に直面するのは齢36歳の時である。中村正直は幼少期から人格も学問も大成しつつあった37年間（内1年半は英国で過ごしている）を江戸幕府の封建制の下で過ごしている。慶応3（1867）年江戸幕府が瓦解したときの報は、幕府遣英留学生

取締として英国に滞在していた時に受けている。昌平坂学問所の御儒者であった中村は慶応2（1866）年、35歳の時に自ら英国留学を志願し川路太郎と共に幕府遣英留学生取締として12名の青少年留学生を引き連れて英国に渡っている。中村は英国において、儒教の理想即ち、修身・斉家・治国・平天下が実現されていることを感知し驚嘆している。そして帰国後の23年間を明治政府下で著作や教育実践を通して自己の理想的人間像、即ち明治国家を支える自主自立の人民を形成するために尽力するのである。

中村正直の教育思想、教育実践の特徴は、青少年男子の教育ばかりではなく、幼児教育、女子教育更には障害児の教育にも目を向け、これらの教育の重要性、必要性を論じ、自ら実践しているところ見られる。中村正直の教育思想、教育実践の根底には「人間の一世は幼児の教育に在り」という中村の言葉が端的に示しているように、人間の一生は、胎児期からのその子を取り巻く教育環境によって左右されることの認識がある。本稿では中村正直における幼児を取り巻く教育環境の重要性の気づきについて考察してみたい。

## 1　中村正直における人間形成と環境

中村正直が、人間の形成に教育環境が深く関わっていることを認識していたことは明治7（1874）年私塾同人社の宗教教育と英語教育をカナダメソジスト教会宣教師カックランに依頼する時の書状の文面から明らかである。中村は次のように記している。

> 実に善人に接すれば不知不知のうちに良き感化を受け、香はしき花園を過ぎる者には、その芳気必ず衣に残る次第に有之候。先生もし枉（ママ）（枉）げて拙宅に御住居被下候はゞ、御教訓を垂れ玉はずとも、必ずや先生の良き感化を蒙る事を信じ申候。(11)

中村は、言葉で教訓を示さなくても、人間性の優れた人に接していればその人の言動から知らず知らずのうちに良い感化影響を受けること、人間は良い環境の中で過ごすことによって、自然にその環境から良い影響を受けることを熟知していたのである。中村は、塾生たちがカックランから直接受ける英語聖書の講義の教育効果もさることながら、カックラン一家の生活を観察し、また敬虔なる宗教者であったカックランと共に過ごすことによって、知らず知らずのうちにカックランの醸し出す宗教的感化を与えられることを意図して、洋館を建てて、カックラン一家を招聘したのである。

中村正直が文化学術団体明六社の社員として、人間形成における道徳的宗教的環境の重要性を論じた説に「人民ノ性質ヲ改造スル説(12)」と「善良ナル母ヲ造ル説(13)」がある。

中村正直は、明治8（1875）年2月、明六社の会合において、「人民ノ性質ヲ改造スル説」を演説し、明治の新時代になっても未だに封建制下に育まれた自立心を持たず他人を頼るなどの奴隷根性の人民の性質を改造し、欧亜諸国の人民の高等の度と並ぶ新時代にふさわしい「善良ナル心情高尚ナル品行」を持つ人民の形成を主張している。その主要な教育として中村は「芸術」と「教法」の二大分の教育を挙げている。中村によればこの二大分の教育、即ち「芸術」と「教法」は、「車ノ両輪鳥ノ両翼」の如く両者「何レモ」欠くことができず、「互ニ相資助シテ民生ヲ福祉ニ導ビク」のである。続いて中村はこの二大分の教育「芸術」と「教法」について、更に詳しく「善良ナル母ヲ造ル説」（明治8年3月16日、明六社演説）において次のように論じている。

余前ニ人民ノ性質ヲ改造スル説ヲ演ベ、モーラルレリヂヲス ヱヂユケーション（修身及ヒ敬神ノ教育）アートサイエンス（技芸及ヒ学術ノ教育）コノ二大分ノ教育ニ由ラザレバ人民ノ心ヲ一新シ高等ノ度ニ進マシムル能ハザル了ヲ説キタリ、コノ二大分ノ教育何レモ肝要ナレドモ其一ハ本源ニシテ其ニハ末流ナリ、

中村によれば、二大分の教育即ち「芸術」と「教法」の両者は互いに補い合い「何レモ肝要」ではあるが、本末論から言えば、「教法」即ち「モーラルレリヂヲスヱヂユケーション（修身及ヒ敬神ノ教育）」を本源とし「芸術」即ち「アートサイエンス（技芸及ヒ学術ノ教育）」を末流とするのである。なぜならば、芸術（技芸ノ教育）は知識欲が旺盛となる5、6歳頃から始めても決して遅くはないが、教法「修身及ヒ敬神ノ教養」は生涯の初めが肝腎で、胎教から始まり、乳幼児は身近な人間の「嘉言善行」を「絶好ノ儀範」として耳や目を通して即ち知識としてではなく感覚的、実際的に「知らず覚えず」「先入主」とするからである。中村は、幼児期における道徳宗教教育は身近な人間、特に母親の言葉を聞きその行動を見て自然に学び儀範として身に付けること、即ち幼児期の道徳的宗教的環境によって自然に身に付けた道徳的宗教的教養が「先入主」となってその人間の基礎をつくり、その後の成長発達を方向付けることを認識していたのである。

## 2　中村正直における環境教育の重要性の認識

### (1) 中村家の育児環境

では中村正直はどうして「実に善人に接すれば不知不知のうちに良き感化を受け、香はしき花園を過ぎる者には、その芳気必ず衣に残る」ことに着目し、環境が知らず知らずの

うちにその人間の形成に大きな影響を及ぼすことを認識したのであろうか。「朱に交われば赤くなる」という慣用句がある。この言葉は「人は交わる友によって善悪いずれにも感化される」という意味に捉えられている。この言葉の出典は中国の書物『傳玄』「太子小傳箴」(近朱者赤、近墨者黒」) (14) で、中村正直も戒めの言葉として知っていたであろう。

この慣用句が中村正直の人間形成における環境の重大性を認識するに至ったその源になっているのかも知れないが、中村正直が人間形成と環境との関係を認識するに至った大きなきっかけは、信仰心に厚く向上心に長けた父母による家庭教育、自らの幼少期の家庭環境にあると思われる。そして第二には英国において実際に接した英国の友人や見聞したその家庭生活にあり、第三には英国で出版された "Self Help" や "Character" などの著作物の中に存在していると思われる。そこでまず中村家の教育環境から見てみたい。

中村正直は天保3年（1832）年5月26日二条城交番同心中村武兵衛重一の長男として江戸麻布で生まれている。母は松村氏の出である。石井民司著『自助的人物典型中村正直伝』によれば、武兵衛夫妻は初め子どもに恵まれなかった。このことを憂えて、妻が江戸大塚の日蓮宗本伝寺に一日籠って男児出生の祈願をし、やがて授かったのが正直であるという。武兵衛は正直を「日蓮上人（本伝寺は日宗なり）の申し子となし (15)」て、大切に育てた。『自助的人物典中村正直伝』には次のように記されている。

> 先生既に生る。武兵衛君弄玉の喜びに堪へず、これ上人の申し子なり、行く末如何に出世するも計り難し、と、愛養頗る厚く、日常心を用ひて、文事に近つかしめたり。(16)

この記述から、武兵衛夫妻は中村の誕生をこの上なく喜び、日蓮上人から授かった申し子として、将来を見据えて愛情深く養育し、常日頃、文字や書物に親しむように心を配っていたことが窺われる。

中村正直は明治16（1883）年、52歳の時に「自叙千字文」を著して、自己の略歴を披瀝している。「自叙千字文」に中村の両親の愛育ぶりが次のように記されている。

> 父母鞠養、哺乳諄誨、猫犬李梅、忠孝仁義、斯ノ如キ等ノ字、次第ニ認記ス、是レ夙慧ニ非ス、濡染ノ致ス所、髫齔策ヲ挾ミ、論孟学庸、樹ニ登リテ蝉ヲ補リ、草ヲ披テ蛩ヲ求ム、棗栗勧奨、汪濊恩深シ、毎ニ念テ此ニ到レバ、涕涙襟ヲ霑ス、燈下針薊（黹）、霰雪夜厳、故事ヲ談話ス、内ニ良箴ヲ寓ス、鼓舞誘掖、茲ノ妙法ニ頼ル，叱咤聞ク靡ク、鞭笞奚ゾ及バン、(17)（原漢文）

中村正直が「斯ノ如キ等ノ字、次第ニ認記ス、是レ夙慧ニ非ス、濡染ノ致ス所、髫齔策ヲ挾ミ、論孟学庸、木ニ登リテ蝉ヲ補リ草ヲ披テ蛩ヲ求ム、」と述べていることから、中村は、幼少の時から筆や硯、論語や孟子、大学、中庸（四書）などの書物に取り囲まれて生活し、水が染み入るように自然に文字を覚えたことや木に登ったり、草を分けて蛩を探したりできる自然環境の中で養育されたことが理解できる。『自助的人物典中村正直伝』には次のように記されている。

先生又頗る強記、人に過ぎしは、父君嘗て、先生を負ひて外出し、途上過ぐる所の市鄽の屋号を教へ、還るとき之を問ひしに、先生背上に在りて一々之に答へ毫も遺失無かりしといふ、[18]

この記述から、記憶力の優れた中村正直像が浮かぶ。そして「霰雪夜厳、故事ヲ談話ス、内ニ良箴ヲ寓ス、鼓舞誘掖、茲ノ妙法ニ頼ル、叱咤聞ク靡ク，鞭笞奚ゾ及バン」と記していることから、中村家の教育は叱咤や鞭笞をもって強制的に行う教育ではなかったことが理解できる。寒い夜などに母親が針仕事をしながら「内ニ良箴ヲ寓」している故事や日蓮上人の教えを語るなどして中村を励まし、中村の精神に自然に戒めの言葉や日蓮上人の教えが染み込むように心を配っている。

中村は来し方を振り返り自らの人間形成に大きく影響している両親の配慮に、「汪濊恩深シ、毎ニ念テ此ニ到レバ、涕涙襟ヲ霑ス」と記して、深く感謝をしている。

### (2) 英国における家庭環境の見聞

この中村正直が人間形成に宗教が深く関わっていることを察知するのは、信心深く「日蓮上人の申し子」として育てられた自らの家庭環境にあることは確かなことであるが、中村が人間形成にとって幼児期の家庭環境がいかに重要であるかを察知した大きなきっかけは、英国における見聞と生活体験にある。そこで次に中村正直が実際に見聞した英国人の家庭環境に焦点を当て考察してみたい。

中村正直は、少年時代に英国の隆盛は「女豪傑」である「維多利亜」女王によってもたらされたものであると聞いていた[19]が、慶応２（1866）年、実際に英国の地を踏んで、そうではなく、「人民篤ク天道ヲ信ズルニ由ル。人民自主ノ権ヲ有スルニ由ル」と「自助論第一編序」に記しているように、宗教心を秘めた自主自立の人民がもたらしていることに驚嘆し、英国人民の人間形成に着目している。

中村正直は幼少期から儒学を学び、16歳の頃からは蘭学を、24歳になると英学も修学し留学以前から、儒学だけでなく欧米の学問や文物制度に強い関心を抱いていた。昌平坂学問所の儒者であった齢35歳の中村をして、儒者の己こそが留学すべき必然性があること認めて「留学奉願候存寄書付」を幕府に差し出し、10歳以上年の離れた青少年と共に英国留学を叶えた真骨頂もここにある。

この時の幕府遣英留学生一行は中村正直そして23歳の川路太郎を取締として12歳から22歳の青少年14名である[20]。留学生一行は駐日英国公使パークス（Harry Smith Parkes 1828～1885）から依頼された英国海軍士官で牧師を兼ねていたロイド（W. V. Lloyd 1825～1896）に引率されて、英国船ニポール号に乗り、慶応2年（1866）年10月25日に横浜港を出帆、同年12月28日ロンドンに到着している。ロイドは行程中、留学生一行の英語指導及び生活指導を行っていたが、ロンドン到着後ホテルに滞在した留学生一行の世話も英国政府より依頼されて引き受けている。ロイドは留学生を分宿させたがらず、しかもホテル住まいは浪費であるとして留学生のためにランカスターゲート16番地の石造り五階建ての大家屋を購入して慶応3（1867）年2月から己の家族及び留学生一行と生活を共にしながら助教師を雇用して留学生たちを教育したのである。ロイドは倹約家であり、学習方法などを巡って時折留学生たちと対立し若い留学生からの評判は決して良くなかったが、中村正直にとっては英国人の家庭生活の様子を見聞する絶好の機会となったのである。

ところで、留学生たちに英国の生活様式を最初に指導したロイドとはどのような人物であったのであろうか。

藤井泰「幕府イギリス留学生に関する一考察 ――世話人・W. V. Lloydを中心として――[21]」によれば、ロイドは1844（弘化元）年パブリックスクール、シュルーズベリー校を、1850年にダブリン大学トリニティ・カレッジを卒業した「いわゆるジェントルマンの教養を身につけた人物」で「海軍の士官であると同時に英国国教会の牧師」であった。ロイドはこの時42歳、妻キャロライン・エイルマーとの間に二人の娘ソフィアとエミリーがいた。中村正直は英国の「いわゆるジェントルマンの教養を身につけた」、しかも「英国国教会の牧師」であったロイドの家庭生活の様子をつぶさに見たものと思われる。

ロイド一家の他に中村正直と親しく接した英国人には、留学生一行の英語や算術等の個人教授であったエドワード・モートルビィ、「初代香港総督、英国におけるシナ研究の創始者の一人」であったジョン・デビス、「チェチェスターから自由党の代議士に出たこともある」「ビクトリア朝のジェントリーの一つの典型」ともいえる人物のハンフリー・フリーランド、安政5（1858）年日英修好通商条約締結の折にエルギン卿の秘書として訪日、文久元（1861）

年に駐日英国公使館一等書記官として再度来日したが、着任早々東禅寺で水戸浪士の襲撃を受け負傷して帰国、後に下院議員となったローレンス・オリファントなどがいる。

16歳の年齢をはるかに超過していた中村正直、そして川路太郎（23歳）、岩佐源二（22歳）の3名を除く11名の留学生は猛勉強の末、慶応3（1867）年の末頃ユニバーシティ・カレッジ・スクールに入学、入学が叶わなかった3名は引き続きエドワード・モートルビィから個人教授を受けながら、自学自習に努めた。

留学生一行は勉学の傍ら、英国外務大臣スタンレー卿の好意により陸海軍武器庫、造船所、製鉄所、ロンドン塔、水晶宮、ダービー競馬、植物園、新聞社、ポースマス軍港、ウインザー城、ウールリッチ＝オルテナンス＝マヌハァクトリー、陸軍練兵、陸海軍博覧会等、英国の発展の象徴ともいうべき施設を見学し知見を広めている。

さて中村正直は、英国の家庭をどのように観察したのであろうか。このことに関しては、明治24（1891）年6月7日中村が死去したとき、中村の死を悼んで『女学雑誌』に寄稿した巌本善治の追悼文、「社説敬宇先生」が大きな示唆を与えてくれる。巌本善治（1883～1942）は、明治9（1876）年から13年まで中村正直の私塾同人社で漢学と英学を学び、明治19（1886）年から『女学雑誌』を主宰し兼ねて編集者となった人物である。巌本善治は次のように述べている。

想ひ起す、明治八九年の頃、先生屢ば基督教を講じ、日曜日はカックラン師を招聘して同人社三百の書生に敬神愛人の道を聴聞せむし。又嘗て愛敬の歌を作り、歌ふて、愛敬を尽せ、愛敬を尽せといふ。語尚耳にあり。[22]

巌本善治は明治8、9年の頃の「愛敬を尽せ、愛敬を尽せといふ。」中村の言葉が、年月を経た今日「尚耳にあり。」と記していることから、中村の言葉は巌本善治の心に深く刻まれ支えになっていたと推測される。ちなみに「愛敬を尽せ」とは「敬神愛人の道」を実行すること、神を敬し、人を愛すること己の如く、貧者に施し病者を救い、どのような人にも広い心で平等に接すること[23]を意味している。

巌本善治は、中村正直が英国の家庭の様子を見聞して感激した様子を次のように記述している。

先生、英国に居て和楽せる高潔のホームを見、女徳の秀好にして且つ深遠なる者に交わり、感激の念大方ならず、密かに考ふるに儒教亦た女徳を重んずること切なりと。則

はち、東西両教の真理に則とりて、大いに女子教育を奨励せり。[24]

この記述から、中村が英国において大いに感激したその一つが「和楽せる高潔のホーム」の様子であり、それを作り出す「女徳の秀好にして且つ深遠なる者」との交流である。

それでは「和楽せる高潔のホーム」とはどのような家庭なのであろうか。英国の家庭の具体像については、中村が明治20（1887）年に『東京学士会員雑誌』に寄せた「漢学不可廃論」に記されている。

欧米ノ人民、智力競争ノ中ニ在テ、室家ノ安楽ヲ享用シ、幼稚ノ教訓ヲ篤クシ、晨起ノ後、盥漱ヲ終ヘ、衣服ヲ著ケ、食前ニ、一家団欒シ、上帝ニ向ヒ、礼拝祈禱シ、食ニ臨ミ、又禱文ヲ口中ニテ微唱スル如キ、ソノ優美ナル風俗貧富ニ通ジテカクノ如シ、蓋シ人ニ、名利ノ念アルハ、実事ナリ、敬虔ノ念アルハ、亦実事ナリ、二者並ヒ行ハレテ相悖ラズ、欧米ノ富強ハ源ヲ此ニ発セリ、[25]（傍点・圏点－原文のまま）

中村によれば、人民の室家（家庭）は欧米の富強の源になっている。欧米の人民は知力を競う競争社会にあって、名利即ち名誉欲や利益追求の念を持っているが、神を敬い己を虔しむ心も持ち合わせている。人民の家庭は夫婦円満で穏やかな雰囲気で、幼児の教育に熱心である。起床後、口を漱ぎ洗顔して衣服を整え、朝食前に一家団欒し神を敬い礼拝祈祷する、また食事を摂る時にも小声で祈祷文を唱える。これらの宗教と結びついている優美な生活習慣を貧富の別なく皆同じように行っている。中村は欧米の宗教を基本とする生活習慣について「ソノ優美ナル風俗貧富ニ通ジテカクノ如シ、」と感動しているのである。そしてこれら家庭の優美なる風俗習慣が、幼児の生活習慣にもなることを察知し、これらの幼児が身に付ける優美なる生活習慣こそが欧米の富強の源になっていることを学んだのである。

これまで中村正直が人間形成と環境との関係を認識するに至った大きなきっかけは、信仰心に厚く向上心に長けた自らの父母による家庭教育、自らの幼少期の家庭環境にあることと、英国において実際に見聞した英国民の家庭の優美なる風俗習慣にあることを見てきたが、人間形成と環境との関係を確信させたものが英国で出版された“Self Help”や“Character”などの著作物の中に存在していると思われる。そこで中村が訳述した『西国立志編』や『西洋品行論』の中に人間形成と環境との関わりがどのように記されているのか検討してみたい。

**(3)『西国立志編』『西洋品行論』に記述されている人間形成と環境との関わり**

『西国立志編』は、江戸幕府瓦解のため幕府遣英留学生一行が英国から帰国を強いられた時、H・W・フリーランドから中村正直に餞別として贈られた"Self-Help：With Illustrations of Character, Conduct, and Perseverance"を翻刻した訳述書である。"Self Help"の著者はサミュエル・スマイルス（サミュエル・スマイルズ　Samuel Smiles）で1858年7月に初版が出されているが、中村が贈られたものは「一千八百六十七年倫敦出版」の増訂版である。中村は帰国の船中"Self　Help"を「寸刻も手より釈てず、愛読数過、其の半を暗唱するに至[26]」ったという。中村は、"Self　Help"を読破して、英国で見聞し察知した英国の富強の源がスマイルスの言う「人民の品行」にあることを確信し、帰国後明治3（1870）年11月静岡の地で翻刻、同3年11月から明治4（1871）年7月にかけて13編11冊を発兌している。表紙は『西国立志編 原名 自助論』、扉には「官許 明治庚午初冬新刻 中村正直訳　SELF　HELP *By Samuel Smiles. Translated by K. Nakamura*　英国斯邁(スマイ)爾斯(ルス)著　西国立志編　原名　自助論　一千八百六十七年倫敦出版　駿河国静岡藩木平謙一郎蔵版」と記されている。ちなみに静岡の地では、明治5（1872）年J・S・ミル著"On Liberty"が翻訳され『自由之理』として出版されている。

『西洋品行論』は「英国斯邁爾斯原撰」を「敬宇中邨正直訳述」したもので第1編が明治11(1878)年6月に出版されている。『西洋品行論』の原名は"Character"（1871）で著者は"Self Help"と同じスマイルスである。中村は明治5(1872)年に大蔵省の翻訳御用を仰せつかり、東京に移転している。『西洋品行論』は東京で明治11(1878)年6月に第1編が出版された後、明治13（1880）年3月に第12編「大尾(たいび)」即ち12編をもって終わっている。中村はこの書を訳す理由を「西洋品行論序」において次のように述べている。

> 書ヲ訳スルハ、九方皋(こう)ガ馬ヲ相スル、其ノ皮相ヲ舎テ其ノ天機ヲ観，其ノ精神ヲ領スルガ如キヲ要ス・・・余未此ニ進ムニ能ハズ、願ハクハ学バン、

この書を訳すのは、良い馬を探す名人である九方皋が良馬か否か判断する時にその外見を見るのではなく目に見えない自然に備わっている資質を見て馬を手に入れるように、この著書から西洋の精神を学ぶためである。

中村正直の訳述は「単なる翻訳書の出版ではなく、彼の近代人としての思想をそれら諸書に託して表現したものといえる[27]」。あるいは「只スマイルスの原書を仮りて、自己の主張を発表せるにも等し[28]」いと評価されている。中村正直はこれらの書物から欧米の富

強の秘密を学び、これらの書物に記されている文言を「善良ナル母ヲ造ル説」などに引用するのである。

さて『西国立志編』の中に環境と人間形成はどのように記されているのであろうか。なお中村正直の訳述書は縦書きであり、難解な漢字には右側にルビが、左側に意味が付されているが引用文においては、付されている意味を省略する。

『西国立志編』第12編10冊の「第十二編　儀範又曰典型ヲ論ズ　㊀家裡ノ教化最モ緊要ナル事、并ビニ家国同一ナル事」においては、次のように記されている。

凡ソ人、目見ニ由リテ知識ヲ得ルヿ、耳聞ニ比スレバ多シ、真実ニ観覧シテ證知スルヿハ、特ニ読ミ聞クモノニ比スレバ、ソノ心ニ覚感スルコト遥ニ深シトス、就中児童ハ、眼目ヲ以テ知識ノ門戸ト為ス、凡ソソノ見ルトコロノ事ハ、知ラズ覚ヘズ、自ラコレヲ視倣モノナリ、故ニ児童ハ己ノ傍ニ圍繞シ共ニ居ルトコロノ人ノ表様ニ、自ラ似ルヿ、恰モ虫ノ色、ソノ食フトコロノ葉ノ色ニ似ルガ如シ、サレバ、家裡ノ教養ハ、最モ切要ナルモノニシテ、決シテ忽ニスベカラズ、抑モ郷塾府学ニテ教フルトコロ、固ヨリソノ功効ナシト云フベカラズ、然レ𪜈、家裡ニ於テ立ツルトコロノ好キ儀範ノ感化ニハ及ブベクモアラズ、家中ノ儀範コソ、実ニ後来男女ノ品行ヲ鎔鋳スル基本ナレ、（傍点・圏点・ルビ－原文のまま）［1丁裏～2丁表］

ここでは、耳を通して得た知識よりも、目を通して実際に見て学んで認知したことの方が深く心に浸透することが記されている。とりわけ子どもは目をもって知識を得る入り口としているので、見たことを自然に見倣うものである。だから子どもを取り巻き傍らにいる人間の様相に自然に似てくる。それは虫の色がその食する葉の色に似てくるようなものなのである。

人間、とりわけ子どもは、目を通して周囲の環境を感知するので家庭環境が子どもにとって儀範、即ちよりどころとなる規範となる。しかも家庭の儀範は男女の将来の品行を養う基本であることが記述されている。そして「家裡ニ於テ立ツルトコロノ好キ儀範」の詳細が次の「㊁父母ノ儀範」の項目に記されている。

品行儀範ハ、縦ヒ極メテ瑣細ナル事ト雖𪜈、決シテ軽シジ忽ニスベカラズ、何ニトナレバ、コノ事、常ニ他人ノ行状ニ関係シ、善悪トモニ他人ニ分チ與フルヿナリ、サレバ、父母ノ為セシ挙動ハ、ソノ子必ズ再三コレヲ行フモノニシテ、就中父母ノ毎日言行ニ顕

ハルヽ、仁愛ノ事、循守スル所ノ規矩、勤勉ノ事、及ビ自(ミ)ラ其身ヲ謹ミ修ムル事、凡ソカクノ如キモノハ、其子久シキ後ニ至レ𪜈、自(オ)ラ心目ノ間ダニ在テ忘ルベカラズ、耳ヨリ聞ケルモノハ、尽ク忘却スル後ト雖𪜈、コノ目ニテ習慣セシ冂ハ、憶(オモ)ヒ出シテ、コレニ倣(ナラハ)ハント思フ志、マタ萌生ス、(傍点・ルビ－原文のまま)［3丁表］

ここには品行や儀範は些細なことであると言っても決しておろそかにしてはならないことが述べられている。なぜならば、品行儀範は他人に大きな影響を与えるからである。父母の挙動、とりわけ父母の日々の言行に現れる思いやりの心や遵守している決まり事、勤勉である事や身を慎んでいることなど、これらのことを子どもは毎日目にしているので忘れない。聞いたことは尽く忘れると言っても、実際に見た父母の言動が子どもの習慣となって父母の言動を見倣おうとするのである。

『西洋品行論』においてはより多くの項目の中で、人間は周囲の人間から大きな影響を受けることが記述されている。『西洋品行論』「第二編　家ノ勢力」には62の項目が連なっているが、その内容は恋愛論、夫婦論、特に家庭教育や父母の子どもに与える影響、母親の感化影響が記述されている。第二編「㊃　教育ハ始生ヨリ始マル」には次のように記されている。

上智ト下愚トノ別ナク、人タルモノハ、幼年ノ時、己(オノレ)ヲ圍繞(イニヤウ)スル良善ノ風習ニ感化セラレザルモノナク、其勢力甚ハダ大イナル冂ナリ、人ノ斯世ニ来ルヤ、其始ハ自(ミヅ)カラ助クル冂能ハズ、全タク己(オノレ)ノ近傍ヲ圍繞(イニヤウ)シタル者ニ委托シ、乳養ヲモ、教育ヲモ、受ル冂ナリ、生レテ始メテ気息ヲ吸(スヽ)フ時ヨリ教育ノ事早ク已(スデ)ニ始マレリ、(傍点・圏点・ルビ－原文のまま)［4丁］

「上智」即ち知恵の優れた人と「下愚(かぐ)」即ち極めて愚かな人の別なく人間は、幼い時の周囲の良い風習に感化されない者はいない。幼少の頃の周囲の環境の影響は甚だ大きい。人間は生まれた時は自立していないので周囲の者に身を委ね、乳を飲ませてもらい養育され、教育も受ける。生まれて初めて呼吸をした時から既に周囲の者からの教育は始まっているのである。

続けて「教育ハ始生ヨリ始マル」ことの重要性が次のようなエピソードで示されている。

故ニ一母アリ、四歳ノ子ヲ懐(イダ)ケルガ、牧師ニ問フテ、何レノ時ヨリ教育ノ事ヲ始メテ

宜シカルベキヤト、牧師曰ク、汝今マデ教育ノ事ヲ始メ玉ハ子バ、汝ハコノ四年ヲ失ナヒシナリ、コノ小児ノ顔ノ上ニ、汝ノ笑ヲ光ノ始メテ照セシ時ヨリ、汝ガ教育ノ機会ハ、始マリシナリ、（傍点・圏点・ルビ－原文のまま）［4丁裏］

ここでは、4歳になった子どもを抱いた母親が、牧師に対してこの子の教育をいつから始めたらよいかと訊ねた。あなたは子どもが生まれてから今までの4年間の教育の機会を失っている。子どもが生まれあなたが始めて子どもに笑いかけた時から教育の機会は始まっているのである、と牧師が回答したことが記されている[29]。『西洋品行論』の次の項目「㊄小児ハ自然ニ学習ス」においては、上記の母親が教育の機会を逃したエピソードにおいても、「全ク教育ナシ」とは言えないこと、そしてその理由が示されている。

㊄小児ハ自然ニ学習ス

上ニイヘル如キ場合ニテモ、全ク教育ナシトハイフベカラズ、自ヅカラ教育ノ已ニ始マリシモノアレ氏、ソノ母之ヲ悟ラザル故ニ、之ヲ忽略ニナシタルナリ、蓋シ小児トイフモノハ、独リデニ骨折ラズニ、タヾ真似ヲ為ルバカリニテ、学習スル者ナリ、恰カモ皮膚ノ穴ヨリ、自然ニ染込ガ如シ、亜剌比亞国ノ諺ニ曰ク、無花果樹ハ、相ヒ観ルノミニテ、其果実繁殖ス」ト、小児モ亦然リ、ソノ観玩スルトコロ、豈ニ慎シマザルベケンヤ、小児ノ教師トナルモノハ，儀型（意味―カタチナリフリテホン）ナリ、之ヨリ重大緊要ナル者アラジ、（下線・ルビ－原文のまま）［5丁］

子どもを取り巻く環境が子どもの人間形成にとって重大なのは、子どもというものは努力をせずひとりでに周囲の人の真似をすることによって学習をしているからである。恰も周囲の人間の「儀型（カタチナリフリテホン）」が皮膚の穴から子どもの身体に自然に染み込むようなものである。アラビヤ国に、実のならないイチジクの木は周りを観て果実をたくさんつける、という諺がある。子どもも同じである。子どもは遊びながら周囲のもの見て学ぶので、周囲の物や人間に気を配らなければならない。子どもの教師となるものは周囲の人間の立ち居振る舞いでこれ以上重大で大切なことはないのである。

「㊉二母ハ小児ノ模範」においては、子どもは見たものを習い、手本にするので、模範となるものを子どもの目の前に置かなければならないことが述べられている。

小児ハ、凡ソ視ルトコロノモノヲ、習ハズニハ居ラレヌモノナリ、何ノ物事ニ限ラズ、

小児ノ手本ナリ、雛形(ヒナガタ)ナリ、就中(ナカンズク)言語容貌慣習及ビ行状ノ如キ、皆小児ヲ鑄(イ)ル模型(モケイ)ナリ、律克的(リクテル)曰ク小児ノ最要ナル時限ハ、他人ト夥伴(ナカマ)トナリ、人ノ真似(マネ)ヲ為シ、人ノ為ス事ヲ、己ガ光色トナシ、己ガ形貌トスルヿヲ始ムル時ナリ、小児ヨリ人生ヲ始メテ、許多ノ教師ニ感化セラルヽヿナレド、次第ヲ逐テ、新ハ旧ニ如(シカ)ズ後ハ先ニ如(シカ)ズ、蓋シ人世一生ノ間ハ教育ノ学校ト看做(ミナ)シ、コノ世界ヲ遍歴スル航海師ハ，其見聞スルトコロノ物事ニ感動触発(ショク)セラルヽヿ、少(スクナ)カラズト雖(イヘ)ド、要スルニソノ乳養ヲ受ケシ時ノ感触(ショク)ノ多キニハ及バヌヿナリ、是故ニ模範ハ小児ノ性ヲ鎔鑄(ヨウチウ)スルニ、緊要ニシテ、少(カク)ベカラズ，形状ノ美ナルモノヲ造ラント欲セバ、模範ノ美以ナルモノヲ以テ、前ニ置ザルベカラズ、今小児ノ目前ニ常(ツネ)ニ在ルトコロノ模範ハ、何(ナン)ゾヤ、母ナリ、（下線・傍点・圏点・ルビ－原文のまま）［10丁裏～11丁表］

子どもは見たものを学び手本とする。言葉や容姿、習慣、行いなどが皆子どもの模型となる。リクテルが言うには、子どもにとって最も肝腎な時は、他人と仲間となり、人の真似をし、人のすることを自分の美しさにし、自分の姿かたちにすることを始める時である。人は生まれた時から多くの教師に出会い感化されるが、成長するにつれて新しく学ぶものは既に学んだものに及ばなくなる。一生の間、教育の学校として世界を遍歴する航海士はその見聞するところの物事に感動触発されることが少なくはない。しかしそれは乳幼児期に見て触発された多くの事には及ばない。だから乳幼児の性質を形作る模範が緊要なのである。形の美しいものを造ろうと願うなら美しい模範を目の前に置かなければならない。乳幼児の目の前に常に存在する模範は何か、それは母親である。

ここでは人間は一生の間に多くの事を学ぶが、最も肝腎なのが乳幼児期であること、乳幼児期は見たことから学ぶので目の前に形状の美なる模範を置かなければならないことが記され、その手本は母親であることが強調されている。

中村はスマイルスの “Self Help” や “Character” などの書物を読んで、幼児期における家庭環境、特に母親の乳幼児に与える影響の重大性を確信したことは明らかである。中村正直の論説「善良ナル母ヲ造ル説」や「母親の感化」（『女学雑誌』第82号、明治20年10月29日）などに『西洋品行論』に掲載されている母親像やナポレオン、ワシントンの母など多く人物の母親が引用されている。中村正直の訳述書『西国立志編』や『西洋品行論』等は単なる訳述書ではなく中村自身が学んだことをこれらの訳述書に託していると言える。

## 終わりに

今日の幼児教育施設の教育･保育は「環境を通して行う」ことを基本としていることから、中村正直の教育思想における環境の問題に関心が向かった。中村正直は幼児期の家庭環境と幼稚園環境の重要性を強調している。そこで中村正直がなぜ幼児期の環境の重要性に目を向けるようになったのかその要因を考察してきた。

中村正直の理想的人間像は明治の近代国家を支える自主自立の人間像である。その人間を最初に教育するのが母親である。中村は英国において、英国の隆盛は人民の品行にあり、その人民を誕生の時から教育する母親の役割を実際に英国の女性と接して学んだのである。そして "Self Help" や "Character" などの英国の書物によってその核心を得たことが明らかである。52歳の時に記した「自叙千字文」には、中村正直の幼児期の父母から与えられた家庭環境のことが記されている。中村は恵まれた自らの家庭環境に気付いたのである。中村正直の思想の中では幼児期の環境の問題はその子を養育する女子教育と一体の問題として捉えられている。中村正直は明治7（1874）年私塾同人社に女子の入塾を許し、自ら同人社女学校を創設、そして、明治8（1875）年には東京女子師範学校開校時の摂理（校長）に就任して女子教育に尽力する。しかも、明治9（1876）年11月に我が国最初の幼稚園として開設される東京女子師範学校付属幼稚園創設にも尽力するのである。中村が幼児にとって家庭環境と共に幼稚園の環境の重要性を認識していたことは言うまでもない。幼稚園環境の詳細については、後日に譲りたい。

**【参考】**

図1　西国立志編

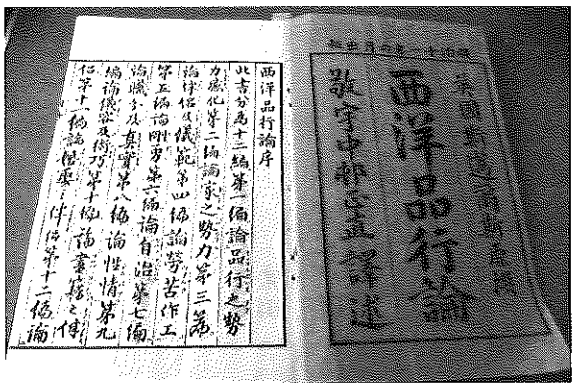


図2　西洋品行論

## 注

(1) 著作権保有文部科学省『幼稚園教育要領解説』2018年　フレーベル館　28頁

(2) 前掲書 29頁

(3) 『幼稚園教育要領』「第1章　総則　第1　幼稚園教育の基本」に次のように記されている。「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、学校教育法に規定する目的及び目標を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする。」（傍点筆者）「環境」に関しては、『幼稚園教育要領』「第2章　ねらい及び内容」の章において幼稚園の「ねらい及び内容」を発達の側面から健康、人間関係、環境、言葉、表現の5領域にまとめて示されている。「環境」は「身近な環境との関わりに関する領域」としても示されている。

(4) 厚生労働省告示『保育所保育指針』「第1章　総則　1　保育所保育に関する基本原則　(4) 保育の環境」

(5) 厚生労働省編『保育所保育指針解説』2018年　フレーベル館　24・25頁

(6) 新村出編『広辞苑』第5版 岩波書店　1998年 593～594頁

(7) アドルフ・ポルトマン著高木正孝訳『人間はどこまで動物か』岩波新書　1961年　82頁

(8) 岩川淳・杉村省吾・本田修・前田研史著『新版 子どもの発達臨床心理』2000年 昭和堂4頁。アドルフ・ポルトマン著高木正孝訳『人間はどこまで動物か』岩波新書 83頁

(9) 中村正直訳述「自助論第一編序」『西国立志編　原名自助論第一冊』5丁表

(10) 中村正直「トウアイ氏幼稚園論ノ概旨」（『同人社文学雑誌』第5号 1879年 所収）5丁表～6丁裏

(11) 倉長巍『平岩愃保伝』教文館　1938年 20頁

(12) 中村正直「人民ノ性質ヲ改造スル説」（『明六雑誌』第30号　1875年2月 所収）

(13) 中村正直「善良ナル母ヲ造ル説」（『明六雑誌』第33号　1875年3月 所収）

(14) 新村出編『広辞苑』第5版 岩波書店　1998年　1248頁

(15) 石井民司『自助的人物典型中村正直伝』成功雑誌社 1907年 3頁

(16) 前掲書　4頁

(17) 中村正直「自叙千字文」（中村正一『敬宇詩集下』敬宇詩集刊行発行所　1926年　所収）56丁表

(18) 石井民司『自助的人物典型中村正直伝』成功雑誌社 1907年 4頁

(19) 中村正直「書西国立志編後」（大久保利謙編『明治啓蒙思想集（明治文学全集3）』筑摩書房　1967年 所収）288頁

(20) 中村正直が英国留学を志願した事由や、他の13名について、また英国での体験については拙著『中村正直の教育思想』「第1章第四節英国における見聞と生活体験」2004年、を参照のこと。

(21) 藤井泰「幕府イギリス留学生に関する一考察―世話人・W. V. Lloydを中心として―」（日本教育史研究会『日本教育史研究』第9号　1990年　所収）

(22) 巌本善治「社説　敬宇先生（上）」（『女学雑誌』第269号　1981年6月13日所収）2頁

(23) 中村正直「自序」（英国彌爾（ミル）著中村敬太郎訳『自由之理　第二冊上』駿河静岡木平謙一郎版 1872年所収）

(24) 巌本善治「社説　敬宇先生（下）」（『女学雑誌』第270号　1891年6月20日 所収）1頁

(25) 中村正直「漢学不可廃論」（『東京学士会院雑誌』第9編の4　1887年 所収）42頁

(26) 石井民司『自助的人物典型中村正直伝』成功雑誌社 1907年 62頁

(27) 高橋昌郎『中村敬宇』吉川弘文館 1996年 47頁

(28) 石井民司『自助的人物典型中村正直伝』成功雑誌社 1907年 70頁

(29) このエピソードは「母親之心得序」に引用されている。「母親之心得序」は明治8（1875）年に近藤鎮三が『母親の心得』を翻刻出版したことを賀して中村正直が寄せた序である。「一母有リ、四歳児ヲ携ヘ一牧師ニ問フテ曰ク。子ヲ教ユルハ何歳ヲ以テ始メルト為ルヤト。牧師対ヘテ曰ク、汝既ニ四年ヲ失フ。汝ガ笑顔之光、小児ノ面ヲ照セシヨリ、汝子ヲ教ユルノ機会始マルト。嗚呼、世固ニ此母ノ機会ヲ失フガ如キ者多シ。是レ此書ヲ作ラルル所以ナルカナ。」（原漢文）